

# 潜在連合テスト(IAT)による隠匿情報検査(CIT)の試み

○水師葉月<sup>1</sup>・平伸二<sup>2</sup>・古満伊里<sup>3</sup>

(1 広島修道大学大学院人文科学研究科・2 福山大学人間文化学部・3 広島修道大学健康科学部)

日本の捜査機関におけるポリグラフ検査では、種々の生理反応を指標とした隠匿情報検査(Concealed Information Test: CIT)が用いられる。しかしながらこの検査の施行には時間を要し、またテロ集団を想定した複数人の同時検査も困難である。そこで近年注目されているのが反応時間を指標とした犯罪関与者の検出である。例えば Sartori *et al.* (2008) は、潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT)を基にした aIAT の有効性を報告している。IAT は対象概念(例えば花とか虫)と属性概念(ポジティブ語あるいはネガティブ語)の連合強度を、それぞれの概念に属している刺激語の分類に要する時間(反応時間)によって測定する。aIAT では、対象概念を真と偽、属性概念を犯罪関与肯定文と犯罪関与否定文とし、画面上に呈示される刺激文を対象・属性概念の各ペアに対して分類させた。しかしながら、被疑者の多くにとっては呈示される刺激文の理解は困難であることが推定される。そこで本研究では、CIT における裁決項目と同様の単語を刺激語とした IAT により、犯罪関与者の検出可能性を検討した。

## 方法

**参加者** 大学生 26 名(男性 13 名, 女性 13 名,  $M = 20.92$  歳,  $SD = 1.24$  歳), そのうち 13 名を模擬窃盗群, その他 13 名を無罪群とした。

**模擬窃盗課題** 模擬窃盗群には、「ある部屋(面接室)に侵入し、その部屋のキャビネットの下段右手の引き戸を開けて金属製の箱の中身を取り出し、かばんの中に収める」ように指示した。箱の中身はイヤリングであった。なお上記下線部は裁決項目であり、IAT において刺激語として使用した。

**IAT** 対象概念は「窃盗」と「放火」、属性概念は「自己」と「他者」を用いた。対象概念の刺激語は、窃盗と放火の犯罪内容を表す単語であり(窃盗については上記下線部、放火についてはライター、新聞紙等)、属性概念は自己と他者を表す単語(自己については私、自分等、他者については友人、知人等)とした。「窃盗」に属している単語はすべて裁決情報であり、「放火」に属している単語はすべて非裁決情報である。「窃盗」と「自己」を一致条件、「放火」と「他者」を不一致条件とした。模擬窃盗群には模擬窃盗後に、無罪群については特に事前課題を与えることなく IAT を実施した。

## 結果及び考察

IAT における誤答率が 15% 以上かつすべての項目に対する平均反応時間が 1,000ms 以上の参加者を除外した。その結果、分析対象者は 19 名(模擬窃盗群 7 名, 無罪群 12 名,  $M = 20.89$  歳,  $SD = 1.33$  歳)となった。

「窃盗」と「自己」との連合強度を表す Dscore (Greenwald *et al.*, 2003) を算出した結果、平均値は模擬窃盗群が 0.085 ( $SD = 0.320$ ), 無罪群が 0.094 ( $SD = 0.257$ ) となり、 $t$  検定の結果、有意差は見られなかった( $t_{(17)} = 0.06, n.s.$ )。

次に、反応時間を従属変数として群(窃盗群, 無罪群) × 条件(一致条件, 不一致条件)の 2 要因分散分析を行った。その結果、群の主効果のみ有意であり( $F_{(1,17)} = 5.02, p < .05$ ), 無罪群に比較して模擬窃盗群の反応時間が短かった (Figure 1)。模擬窃盗群については、「窃盗」を「自己」と「他者」のいずれにも連合づけていることを示している。本来であれば、「窃盗」と「自己」の連合のみが認められると期待した。おそらく模擬窃盗群については、模擬窃盗課題によって「窃盗」概念が活性化されただけでなく、より広範囲の「犯罪」概念が活性化され、「放火」と「自己」についても同時に連合づけられた結果ではないかと考えられる。

以上の結果は、今回使用した IAT パラダイムでは犯罪関与者の検出が困難であることを示す一方で、反応時間による隠匿情報検出の可能性を示すものと言える。今後の研究では、目的とする対象・属性概念ペアの連合強度を高める工夫が必要である。例えば、「放火」はあくまでも他者行為であることを強調するために、放火事件を報道する新聞記事様のものを模擬窃盗群と無罪群の参加者全員に読ませるといったことが挙げられる。これにより、「窃盗」と「自己」、「放火」と「他者」とが参加者にとって明確に区分できるようになると思われる。

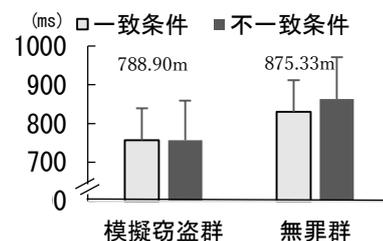


Figure 1. 模擬窃盗群, 無罪群の平均反応時間